

読者の方より以下のご指摘をいただきました。お詫びのうえ、訂正させていただきます。

ページ・箇所	(誤)	(正)	説明など
p.10 式(1.6)の下	$\int \phi_x(\nu) d\nu = 1$ を満たす	→削除	フィルター関数はある波長での透過率。
p.22 ラーソン・ペンストンの解についての記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>内部コア質量が時間とともに増大する。</li> <li>エンベロープ部分が時間発展していないように見えるのは移流の効果。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>(コアは中心密度でのジーンズスケールで決まるので)密度の上昇と共に質量は小さくなる。</li> <li>・エンベロープ部分の進化時間スケールがコアの時間スケールより長いため。</li> </ul>	説明の文章がラーソン・ペンストンの後期解(原始星形成後の進化を表す解)の記述となっていた。
p.30 表 2.1 太陽定数の単位 距離(天文単位)	$J \text{ s}^{-1}$ $5.5 \times 10^8 \text{ km}$	$J \text{ s}^{-1} \text{ m}^{-1}$ $1.5 \times 10^8 \text{ km}$	
p.31 式(2.3)	~	=	
p.35 2 行目	3000 年	30 万年	
p.57 下から 3 行目	上限質量は、太陽質量の数百倍である。	質量が数百太陽質量以上の星は不安定になるが、上限質量との関係は明らかではない。	百太陽質量程度以上の星は構造上不安定となるが、これは星全体が輻射圧優勢となる際に中心部での核燃焼によって駆動される $\varepsilon$ メカニズムの結果であり、 $\varepsilon$ メカニズムは脈動を引き起こすものの星全体を壊すことはないと考えられるので、上限質量とは関係ないというのが、現在の定説。
p.59 (3.6)式の上	(2.22)式	(2.21)式	
p.64 項目 1 の説明 全般	核力の増加がクーロン力の増加にまじて安定化される。…	表面張力が減少することにより安定化される。…	核子数の増加に伴い、原子核の体積に比べて表面が小さくなるので、表面張力の影響が少なくなることが原因。クーロン力による反発は鉄より大きな原子核で束縛エネルギーが減少に転じることの原因。
p.70 7 行目	図 3.10	図 3.9	
p.75 下の二つの段落	「原始星段階がハヤシ・フェーズでその後 T タウリ型星となる」と読めるような記述。	ハヤシ・フェーズとは、T タウリ型星の若い段階で星全体が対流的となつてゐる星である。	原始星というのは降着により質量獲得が続いている段階のことを指し、その後、ハヤシ・フェーズに入る。
p.80 図 3.19 横軸	変更周期	変光周期	
p.88 最後の行	中性子星は…中性子の縮退圧で支えられている。	中性子星は…中性子同士の核力の斥力コアで支えられている。	多くの教科書では確かに「中性子の縮退圧で支えられている」と記述されているが、あまり正確ではない。

p.95 6 行目	(4.17)式を使うと磁場強度が求められ	→削除	(4.17)式からは磁場強度が出てこないため(別の式を用いる)。
p.108 表 4.2 脚注	$v_{\text{acc}} = \sqrt{R/GM}$	$v_{\text{acc}} = \sqrt{GM/R}$	
p.110 式 4.45 左辺	$\frac{4\pi^2 K^3}{GP^2}$	$\frac{PK^3}{2\pi G}$	
p.111	(新星爆発での核燃焼暴走の原因は)「膨張が起きない」から。	(白色矮星表面の薄い層での燃焼は)「自己重力がきかず比熱が負とならない」ため。	縮退状態にある自己重力系の核暴走は、赤色巨星への進化途中に星中心で起こるヘリウムフラッシュの原因となる。
p.156 図 6.11 キャプション p.157 3-6 行目	銀河や銀河団が図のBに対応する	銀河は図のA、銀河団(ガス)は図のCに対応する	銀河はよく冷えて分裂し星の集まりになるのでA、銀河団(ガス)は冷えず高温ガスのままなのでCに対応する。
p.161 の注*35	電波源を QSO、非電波源を quasar/ K. Thorn (1994)	非電波源を QSO、電波源を quasar/ K. Thorne (1994)	
p.164 (6.9)式の上	Mr	M_r	
p.181 下から 2 行目	(ジーンズ波長以下)	(ジーンズ波長以上)	
p.184 下から 6 行目	西洋	西側	